

追 想

長澤 正 -月刊「水」代表-



広瀬孝六郎東京大学名誉教授のインタビューを行う長澤さん（右）

“三位一体” 構図への礎づくり 政界・官界・業界を結びつけ

- 追想 長さんこと、長澤 正 さん・・・柴田昌治 日本ガイシ(株)特別顧問
- 追想 長澤氏と私・・・松井三郎 京都大学名誉教授
- 鼎談 月刊「水」の創始者 長澤 正氏を語る
森田豊治／山崎昭男／吉村和就

月刊「水」代表の長澤正氏が昨年7月15日に90歳の天寿を全うし逝去された。水行政全般にわたり、マスコミ界の重鎮として尽力されたことは周知のとおりである。そこで、良きライバルであり、上下水道界に貢献した仲間として、長澤氏の功績や横顔を振り返ることとした。氏と親交の深かったお二方から追悼文をいただくとともに、氏を慕うお三方には氏を偲ぶ鼎談をお願いした。

追想 長ちようさんこと、長澤 正まささん

日本ガイシ株式会社 特別顧問 柴田 昌治

私が初めて長さんにお目にかかったのは、7年半のニューヨーク駐在員を終え、環境装置事業部東京営業所長として赴任した昭和47年のことであった。

当時の日本は、高度成長の真っただ中であり、東京をはじめとする大都市への人口流入が激化し、社会資本整備が進められる中で、上下水道の市場規模も拡大の一途

をたどっていた。長さんのおかげで東大・京大をはじめとする多くの学者の知己を得たし、また月刊「水」は真面目な水処理技術者の若手達にその論文や研究発表の場を与え、非常に評価が高く、感心させられることが多かった。

東京で10年の営業の後、米国の赤字会社の社長として赴任し、また帰国してからはエレクトロニクスの業界に入ったため、長さんとの縁は切れたままであったが、日本ガイシの社長就任時には、「下水業界の売り子が社長とは業界初だね」と電話を戴いた。



社長就任時に長澤さんのインタビューに応じる

た。長さんは業界の先輩たちを含め、産業界の多くの人々と官界、学会との間を取り持ち、また根本衆議院議員をはじめとする政界の有力者との繋

がりも多かった。その触媒の役割を果たしたのが月刊「水」であり、長さんが立ち上げた「日本水処理工業連盟」であったと思う。長さんのおかげで東大・京大をはじめとする多くの学者の知己を得たし、また月刊「水」は真面目な水処理技術者の若手達にその論文や研究発表の場を与え、非常に評価が高く、感心させられることが多かった。

東京を中心とする下水業界の団体である設備協会を立ち上げた時、「水処理連盟をつぶす気か」と激しく詰め寄られたこともあったが、何度も議論し、業界の発展のためと理解してくれた。

合掌

追想 長澤氏と私

京都大学名誉教授 松井 三郎

現在では全ての国内・国際学会は盛んに個人の顕彰を行っているが、1970年代にこの事業を始めたことで、日本の産官学の連携を進めた触媒的人物として、敢えていえば水ビジネスの背後のドンとして存在されてきた長澤氏の功績は偉大である。

水に関する学協会活動が活発化し情報量が増えたことから、月刊「水」の総合的情報発信の役割が低下したことは、残念なことであった。

企画内容で何度も相談を受けながら、新機軸を出せず廃刊になったが、熱海のご自宅に御病氣見舞いをさせてもらい、奥様の横で昔話に花を咲かせたのが、最後の機会となった。

私の人生で忘れることのできない重要な恩人の一人となった。
合掌

私はテキサス大学オースチン校留学を終えて1972年6月から茨城県土木技師として鹿島臨海工業地帯建設事務所で深芝処理場の建設と維持管理業務を務め、75年4月から金沢大学土木工学科助教

授に任用してもらい、土木学会、日本水道協会、日本下水道協会と発足したばかりの日本水質汚濁研究協会に参加して、活発に研究発表を始めていた時期、恩師岩井重久教授を介して長澤氏とお会いす

道・下水道と水質汚濁対策は、3本が同時進行したが、これらを推進する状況は政治・行政・ビジネス・教育界が深く補完関係しながら進んだ。これらを全て包含する世界でもまれな企画内容を持つ総合水雑誌、月刊「水」を発行したことは、他の先進国に見られない独創性があった。現在、IWAが世界規模で雑誌発行を行っているが、総合性視点の水準では達していない。



月刊「水」のインタビューで

の後、先達のご推挙で非常に若輩にも拘わらず、1983年に月刊「水」賞をいただくことになり、長澤氏と親しくお付き合いさせていたたく機会が始まった。敗戦後の日本復興事業において水

月刊「水」賞は、研究者・技術者・行政官の中から優れた人物を顕彰することで、人物像を通じて水事業の重要性を世間に知らせることに早く着眼したところが長澤氏の慧眼である。

月刊「水」の創始者 長澤 正氏を語る

森田 豊治／山崎 昭男／吉村 和就

功罪相半ばする人

山崎 振り返ってみると、水関係の新聞や雑誌などの専門誌(紙)やマスコミは、日本水道新聞の昭和29年創刊をはじめとして、この数年間の間に誕生しています。雑誌・月刊「水」も昭和33年に長澤さんが設立し、その後約60年間にわたって水の業界を牽引されてきた歴史があります。長澤さんは人物的にもかなり個性が強く、いろいろな話題を振りまいた人ですが、ある意味、日本の水事業の沿革を物語っているようなところもあって、いわゆるオピニオンリーダーであったのではないかと感じます。

一方では、非常に功罪相半ばする人でした。功のほうは誰もできなかつた行政と学会と産業界を束ねるような活動も行っていて、それを雑誌の企画記事で表現していました。そういう演出はすごく上手な人で、それが今日までつながつてきて業界の構図を形作っているのではないかと。そうすると、長澤さんを語ることで、水道や下水道事業がこの60年間でやってきた歴史が見て取れるのではないかと思うのです。彼のようなオピニオンリーダーが今後現れるかどうかは別としても、俯瞰的にこれからの水業界、事業そのものや水ビジネスの今後のあり方のヒントがそこにあると思う

のですが、どうでしょう。

吉村 私は国連の業務の中で世界の197カ国のいろいろな水インフラを見てきました。各国の大使とか学校の先生と話しますと、「日本の水道は素晴らしい」と必ず称賛されます。一方で何が素晴らしいのか。単なる技術が素晴らしいのか、法制度なのか、あるいは政府の方針なのか、いろいろあると思います。私は大学や企業から講師を頼まれたときは、「まず歴史を学びなさい」という話をします。例えばある土地でろ過器が変容していった場合、その背景にはその土地の水の質や需要などいろいろな特性があるわけです。そういうことを理解

した上で浄水場や下水処理場をくらなくとはいけない。そのためには、先人がどこでどんな苦労をしてきたのかを、技術の面でも仕組みの面でも知っておくことが大事だと言っています。

これは発展途上国にしてみれば一番必要な情報です。単なる新しい技術を持って行って使ってくださいでは、長く続かないわけです。ですから、日本の辿ってきた水処理業界の技術、そして誰がつくってきたのか、それがどうやって世界のモデルになったのかを学ばなければなりません。それらを理解した若い人が海外に出ていくと、日本の技術や日本のやり方が世界に広がっていくと思います。

今、国連が推進しているSDGsの17項目中の16項目は水で解決できます。ところが、多くの人は第6項目の「安全な水とトイレ」という問題だけを意識している。ですが、実は貧困の問題、飢餓の問題、海洋の資源の問題、パートナーシップも全て水が介在しているわけです。そのためにはやはり日本の水の歴史、それから人の歴史、水処理技術の歴史を知



パーティーで談笑する長澤さん（中央右）と警視総監から
参議院議長を務めた原文兵衛氏（中央左）

らなければいけないと思います。
そういうことで今日はぜひ、長澤さんがいったい何を行い、伝えてきたのか、どこで苦勞してきたのか、それは誰がサポートしてきたのかといった隠れた話をお聞きして、若い人達に伝えていきたいと思っています。

政財界にも太いパイプ

森田 私の思う長澤さんのすごいところは「人たらし」というか、人と人とをくつつける力がある人

物でした。彼の得意技は人事往来の掌握で、人事を知るのは月刊「水」の誌面を見るのが一番手取り早かった。やはり最大のアセットは人ですから。長澤さんが人と人をつなげて何かする、そういうところが水の業界の発展に寄与していたのではないかと思っています。

今は、下水道と上水道のやっていることがなんだか別々の感じになってしまっている気がしていますね。本来はコミュニティを小さく区切って、下水も

水道も一緒にして、下水を処理してまた水源に戻すといったことが将来必要になるんだらうと思います。もし長澤さんがそういうことに関われば、実現も早そうなの気がします。2つの事業をくつつけて、将来は分散型にして水資源を確保するとか、そういう今とは違う形になるのではないかと。

そういうときに彼みたいな人と人を融合させる達人がいてくれれば、一気に変わるんじゃないかという期待があります。そういう気質を持った人物がこの業界にも一度出てきてほしいですね。

吉村 秋田県初の総理大臣になった菅さんが所信表明の中で「2050年には温暖化ガスを実質的にゼロにしたい」と宣言していました。その中に謳われていることを簡単に言うと、日本全体の水循環をきちっと考えろということなんです。水に関する取組みでCO₂を減らしなさいと。それから、国連などで問題視されているのもやはり温暖化です。温暖化の影響は台風とか洪水とかIn-sar（災害）がもちろんあります。飲み水さえもなくなるというところにこれからの地球全体の課題があるわけです。

そういうことを昭和30年代から考えていたのが実は長澤さんだったかもしれませんが、ですから、まさに今後50年に向けて、先人がどういう努力をしてきたかを我々が知る必要があるということ。彼は実際にいろいろな組織を作っ

ていましたが、そのあたりの話をお聞きできればと思います。

山崎 長澤さんは「水処理」という言葉を世の中に流行らせた人ではないかと思えます。昭和30年代はまだ水には処理という言葉が常用されていなかったのではないかと。し尿処理とかごみ処理といった熟語は使われていたもので、その延長線上で水処理という言葉が流行らせたのではないかと。そして水に関連する組織作りにも奔走しました。まずは「工業用水クラブ」という現在の日本工業用水協会の先達のような組織を昭和33年4月に20社ほどの企業を集めて設立しました。そのときのメンバーが持つ技術の特長やメリットを集約する形で、次に「日本水処理工業連盟」という任意団体を作ったんです。そして会長には当時農林大臣や建設大臣を歴任された秋田県選出の衆議院議員・根本龍太郎さんを据えました。そして、長澤さんと根本さんが水の事業を展望しながら足並みを揃えて官と民と政界との橋渡しを行ったんですね。

当時は日本水道協会も独自の動

きをしていましたから、国側とのつながりを作ったのはこの工業用水クラブであり、一方で日本処理工業連盟という民間を主体とするグループが活動を始めました。

誰がルールをつくるのか

吉村 そうすると、業種に幅のある各社の代表者をどうやってまとめていったのか、そのノウハウが非常に気になります。

山崎 簡単に言うと、根本さんが先頭に立って水問題を解決するぞという号令をかけるわけです。その背後には自民党の大御所もいたらしいのですが、団体を立ち上げたから協賛してほしいと主だった企業に声がけをし、将来の業界、事業の展開と政界とを結び付け、予算確保のための運動を展開しました。

その結びつきが上下水道の施設整備の促進にもつながったのです。誰がメリットを得るかを見つけて手を打ったんじゃないですかね。その頃は、水道は水道、し尿はし尿で、それぞれ環境衛生を問題にして事業をタテ割り行政で行っていましたが、それを横断的に産学官

で結んだのは長澤さんの功績だったと今になってみて思うんです。

吉村 環境関連業界が育てば国の施設整備も進むということを見越していたのですかね。

山崎 産業界からすれば、事業を興す突破口を作ってくれる人物はありがたいわけです。横断的に物事を進めると政界も絡むし、産業界も動き始めるんです。お互いの利害得失ですね。その演出を長澤さんがされたんです。

吉村 やはり急激にインフラが伸びるときに誰がルールをつくるのかという認識が長澤さんにはあったのかもしれない。

山崎 振り返ってみると、下水道は5カ年計画という第8次にわたる長期計画のルールが引かれました。その長期計画をつくったのは自民党でしたが、業界を政界につなげたのは長澤さんがつくった波があったからです。彼一人ではないけれども、モデルをつくったという意味では彼の功績ですね。それぞれの行動が結果的には整備促進という大きな利益に繋がっているわけです。

余談ですが、彼は遊びの場を設

けたり、雑誌「水」を発刊したり、人のために投資を惜しまなかった。極論を言うとか私腹を肥やしていないんです。そこが称賛できる chỗですね。

日経新聞に広告を掲載

森田 長澤さんには人と人とのつながりを作ることに関して天才的なところがありました。例えばIWSAの世界水道会議を日本で開催したときに、大学関係者の間を取り持ったのも長澤さんだったと思います。

吉村 水処理の用語で言うと、長澤さんは凝集剤みたいなもので、さまざまものが入り乱れている中に入って、大きなフロックにすることでそれ自身を力にしたということですよ。しかし、触媒があると必ず触媒毒というものが出てきます。長澤さんに対して反対の意見を持つ人もいましたよね。

山崎 彼は人の扱い方が上手く、敵が少ないんだけど、同時に味方も少ないんです。結局最後まで一匹狼でした。本当に不思議な人で、長澤さんについていくという人は少ないんです。そのぐらい毒

があったわけですね。雑誌「水」は、ゴシップ欄や人事往来などいろいろな話題を提供していました。

吉村 当時はインターネットもない時代でしたが、紙の媒体で、しかも個人名を出して、何をやったかをきちっと載せていましたよね。ある面では大きな力になったけれども、逆の立場からすると恨みを買うこともあったのでは。

森田 人事のことや裏話というのは読みやすいし、皆興味がありますから。それで雑誌の購読者が増えたということもあると思います。

吉村 そうですよ。だから月刊「水」を見ていると、顔写真が大きくて驚きます。経歴も生まれ故郷など故事来歴まで詳しく書いてあるという、あの辺りの長澤さんの人物研究という才能はすごいなと思います。

山崎 情報をうまくつなげるんです。人の出身地や血液型まできちんと覚えていましたから。それともう一つ、彼はものすごい量の本を読破しているんです。中国の論語から始まって豊色本まで読んでいましたね。だから雑誌に意味



水関連5団体共催の新年名刺交換会後にロビーで企業のトップらと談笑する長澤さん（中央左）

深長な中国語の熟語を書くんです。それを文章中に活かしたり、会話の中で活かしたりしていました。話の最中に孫氏の兵法とかが出てきて、そういう論法に変わっていく。これが巧みなんです。

そして、月刊「水」の広告をメジャー紙に載せていました。日経の新聞一面下の広告に今月は〇〇さんにインタビューと、個人名を出してその人を世に送り出すわけです。これは一つの知恵というか戦略なんじゃないかね。

吉村 自分がまとめてきたものをどうやって世間に認めさせるかというパフォーマンスが非常にうまくいったということですよ。

山崎 吉村さんがテレビで水のオピニオンリーダーで持っていくタイプだとすれば、彼のやり方は自分の雑誌をメジャー誌に見せかけるわけです。「このレベルでも俺がやっているのには、この業界が認めてくれるからだ」というような謙虚さはありませんけど、基本は人を試したり、上位にみせたりするための知恵袋をたくさん持っているわけです。そして、若くて成長可能性のある人物の掴み

方が上手でした。一度名刺交換をしたら、ほぼ覚えていましたし、雑誌にも登場してもらっていました。その才能は真似ができないものでしたね。

吉村 やはり選球眼が優れた方なのかなと感じます。今、力のある人、将来伸びる人を見抜く眼があったと。やはり一番底辺にあるのは、この業界をどうやって発展させるのか、そのためにはどんな人材を投与していくかだと思います。

人を結びつけるのは、人々

山崎 こういう人物が今求められていると思います。時代は違いますが、こういう生き方ができる人が必要ですね。

吉村 最近は何でも技術があれば勝てると思われることが多いですが、最終的には、人々だと思いません。そういう面で長澤さんは非常に先進的な眼で見ていたんじゃないかね。

森田 吉村さんが書いた本を読んでいると、やはり最後は地球も水で困ってくる。トータルな水問題を解決するような発想や視点を

■長澤正と根本龍太郎

月刊「水」の創刊50周年を機に、同誌は「歳出し企画」として過去に掲載した主要な記事を取りまとめた特別号を刊行した。その中で長澤氏は次のような言葉を書き残している。「政治と行政と民間は三権分立みたいなのだが、水関連事業も政治はもとより官・学・民が構成する三極が一体となって事業を推進する」。

また、昭和33年に発足した日本水処理工業連盟の会長に就任した根本龍太郎氏に関してもこう記している。「根本龍太郎は本誌の礎であり、大きな支えとなってくれたキーマンである以上に、今日の水処理業界の牽引者であった。(中略)水という事業は、戦後のインフラ整備の中核事業。政治が道をつくり、行政が路線を敷き、地方公共団体が実施する。そして民間がヒト・モノを提供する構図。昭和33年当時、この構図がまだ鮮明ではなかったときに、根本さんは将来の事業展開や組織づくりにも耳を傾けてくれた。おかげで、日本水処理工業連盟の会員22社はゼネコンの下請け業者にならずに済み、独立した業界になった」。

建設大臣、農林大臣を歴任した根本龍太郎氏の配慮と思いが、その後の水処理業界の独立と発展につながり、今なお生き続ける「構図の礎」となっていることを物語っている。

持った人材が必要ではないかなと思っ
ています。

山崎 まさに吉村

さんの活動やOBとして森田さんなどは民間でも異色なタイプなのですよ。一匹狼ではないけれども、独自の理論で表に出て行動している。だから、任せようと思つたら全て部下に任せる。長澤さんもそんなタイプだったから、正統派タイプの人でないと任せられなかったのです。吉村 やはりボスがいないでは駄目ですし、鶴飼いの匠のような人を操れる先見性のある人がいないでは駄目なのです。よね。みんなバラバラにやっていたら全く力にならないので。

森田 現代社会はネットやITは発展

したけれど、人と人とを結びつける人物がいなくなったのですよ。人を惹きつける魅力が少ないというか。

吉村 伺ったお話をまとめると、

長澤さんの業界への貢献は、政界から産業界、財界、大学を上手にまとめて、何とかして水を基本として、改革しようという動きにながったのかもしれない。日本は今ネットが普及してあらゆる情報が入ってくるけれども、実際には何をやるにしても人と人とのつながりがなくなっていく。そこで長澤さんのやり方が見本になるのでしょうか。

森田 私が思うに、彼はやはり団体創設のきっかけづくりをした点で水処理業界に貢献したと思っ
ているのです。あの人がいなかったらできない団体が結構あったのではないかと思っ
ますね。

吉村 これから5Gの時代になつてICTやAIがさらに普及していきま
す。水循環全体を考えたも
この情報で、降雨量を知ることが
できる時代になりました。

そのような世界になつてくると、

全体を俯瞰して考えて、あらゆるデータをどう活用するのかを考えるとが求められます。

森田 だからこそ100年先を見据えた長期的なビジョンをもつてほしいですね。実現するのは50年後かもしれないし25年後かもしれないけれど、水道も下水道も、もう少し夢を持って、長期展望に立ったプランで行動をしてもらいたいと思います。

山崎 結論としては、やり遂げるといふことが必要かもしれません。今一番足りないのはやり遂げる力ではないかと思っ
ます。やってみて駄目ならしょうがないと思っ
ますが、やり遂げないで「駄目だ」で終わってしまうことが残念です。現在のよう
なITやICTやAIがこれから加速的に普及する時代に、どんな発想をして、どう世の中を変えていくのか、想像するだけでも面白い
ですね。

吉村 この鼎談を読んだ人の中から、第二の長澤さんのようなユニークな人物の誕生を期待したいですね。「水は国家なり」ですから。